

# 施設収容児に関する臨床心理学的研究

—— 箱庭とプレイにあらわされた家族イメージ ——

大西俊江\*・伊藤俊子\*\*

Toshie ONISHI and Toshiko ITOH

The Clinical Psychological Study of the Child in the Institution

— The Family Image in the Process of the Sand Play and the Play Therapy —

## 1. はじめに

養護施設は、家庭的な事情から収容保護を必要とする1才以上18才未満の児童を入所させて養護する施設である。対象児童は(1)保護者がいない、(2)虐待されている、(3)その環境上養護を要する児童であり、家庭にかわる環境の中で、複数の職員（施設長、児童指導員、保母、嘱託医など）によって養育される。

0才から2才児を対象とした乳児院や養護施設で養護される児童は全国で33,000人にもほっているといわれている。そのなかでも親の離婚、虐待、養育放棄、疾病などさまざまな要因から家庭が崩壊し、施設にいれられる子どもの数は増加傾向にある（「子ども白書'92」）。

厚生省児童家庭局の資料（1987）によると、入所理由で最も多いのが、両親の行方不明（24.9%）で、次いで両親の離別（18.7%）父（母）の長期入院（11.2%）両親の死亡（7.2%）となっており、また10年前の1977年の調査と比べて、虐待、親の養育放棄、棄子、親の精神疾患が、わずかずつながら増加していることを示している。

急激な社会変動ともなっており、現代の家族形態及び家族関係は大きく変貌してきており、家族が抱える問題も大きく、それが養護施設に凝縮されている。

このように親から切り離され、養護施設に余儀なく入所せられた子どもたちは、同じような境遇の子どもたちと集団的処遇を受けることになる。施設保護は家庭の

代わりとして衣食住の機能を第一義的に保障するが、子どもひとりひとりの個別の欲求を満たすことは不可能である。集団的処遇では、個々人の発達保障は無視され、集団になじまない子どもは拒否されやすく、不適応行動を来すケースも多い。施設児の高校進学率も58.5%ときわめて低い（「養護施設中卒児童進路状況調査」全国養護施設協議会1987）。

施設職員は交替勤務制をとっており、施設によっては10種類にもおよぶ変則交替勤務によって、子どもの保護にあたっているところもあると聞く。伊藤（1978）はこのことは保護の一貫性を否定し、機械的、事務的な職員の態度となって現れ、子どもたちに精神的、情緒的不安感を与え、人格形成上での問題となっていることを指摘している。施設保護が十分に子どもの発達を保障しえない現実にあつて、それを補う福祉制度として家庭代替保護の里親があるが、その恩恵を受けることができる子どもはきわめて少数である。

このような施設児に関する研究は、20世紀初め、欧米の小児科医による「ホスピタリズム（施設病）」の研究を端緒として盛んに行われ、次第に精神医学者や心理学者の注目を集めるようになった。当初問題とされた施設児の罹病率や死亡率の高さは、その後医学的管理の改善により大幅に減少したが、精神的な問題が明らかになってきたことは周知のとおりである。施設児の問題が身体的発達から知的発達の遅れや情緒障害などの精神発達の問題へと研究者の関心が移っていったことを高木（1959）、渡辺（1982）は詳述している。

Bowlby, J (1951) は「母性的養育の剝奪」(maternal

\* 島根大学教育学部教育心理研究室

\*\* 島根大学教育学部教育研究科学校教育専修

deprivation) に関するモノグラフにおいて乳幼児の健全な発達を促進する基本的な養育環境としての正常な家族の存在をあげ、それが剝奪された乳幼児の心身の反応とそれにもとづく発達障害について言及している。乳幼児と母親、または母親代理との人間関係が、親密で持続的で、さらに母子がともに満足と幸福感によって満たされるような状態が精神的健康の基本であり、このような母子関係が欠如した状態が一定期間以上続くと、非可逆的障害が生じ、心身に永続的な発達障害を残すことを明らかにした。この研究は、子どもの発達にとって、何よりも母親の愛情が大切であるという観念をさらに一般化させ、施設や保育所に預けることに対する危惧 (WHO 1951) や、母親の就労への批判 (Bears, M., 1954) となった。また、母親の不在が施設児の障害の第一の要因だとする主張においては、母子の身体的分離が強調されているが、施設児にとって真の問題は、母親との身体的分離にあったのか、分離後の施設の生活それ自体にあったのかは明らかにされていない (大日向1991)。

Rutter, M (1972) は Bowlby の母性的養育の剝奪理論の功罪について詳しく言及している。さらに Rutter, M (1982) は「養育者が実の母であるかどうかの問題ではなく、養育者が頻繁に変化するところに子どもの問題形成の原因がある」と指摘している。すなわち、施設の中で幼児が長期的に誰かと深い信頼関係を形成していくことが必要であることが強調されている。しかし、やむを得ず施設に収容された子どもたちに対して、心理治療的なかかわりの実践は、日本ではかなり遅れており、ほとんど行われていないのが現状のようである (森田1990)。森田は、施設児に対して行った遊戯療法の意義について、その治療的場が、唯一ホメオステシスを維持できる安定した場として存在すること、さらに治療的なかかわりが子どもの心の世界の表現を助け、抑圧され続けた negative な感情の放出を保証し、感情放出のための対象を提供することになると述べている。

筆者らは、昨年度から、心理治療的関わりの必要を痛感された養護施設の施設長から援助の要請を受け、数人の子どもたちに個別にかかわってきた。

本研究では、一応家族ひきとりとなり終結した事例について、その子の家族についてのイメージと関わりの経過からみた子どもの変化に焦点をあてて考察した。なお事例への直接的援助は伊藤が担当し、スーパービジョンを大西が行い、考察は共同で行った。また事例の匿名性を保つよう記述には配慮した。

## II. 事例の概要

### 〔事例〕

A子 (小学6年生12才)

### 〔施設からだされたA子の問題点〕

清潔面の事がきちんとやれない。(尿で汚れた体をきれいに拭くことや、汚れた衣類を洗濯に出さず、たくさんため込んでいるなど)

勉強面、生活面で捨てばち、逃避的態度。

### 〔家族構成〕

父 (49才)、本児、弟 (小1. 7才)

妹 (保育園. 6才)、母方祖母 (65才)

### 〔家族歴〕

父はK県出身。病弱で難聴 (身障手帳2級)。これまでパチンコ店従業員が多いが長続きせず、各地を転々とする。1978年、S県A市に転入。女性と同棲。K県H市へ転出後、結婚。'81年、再びA市に転入、A子の母と知り合っ同棲を始める。妻と離婚後、再びH市へ転出し'83年3月に本児の母と結婚する。本児は母 (31才、軽度精神薄弱) の連れ子であったが結婚と同時に認知。'83年12月に三度A市に転入現在に至る。'85年5月から生活保護受給。'86年8月、母の就労 (ホステス) により生活保護廃止。

もともと母は養育観念に乏しく、子供のことは父や祖母に任せきりであった。職業柄、午前4~5時の帰宅が続き、そのうち新たな男性関係もできて家に帰ることもまれになり、'87年10月1日離婚するに至った。この離婚により父が本児ら三人の子どもを養育することとなったが父が病弱であり、登校拒否、無断外泊等問題のある本児を養育することが出来ないため、'87年12月1日に施設措置となった。母は本児入所2カ月目に来訪しただけで、その後の来訪連絡等は一切ない。本児についての施設の記録によれば母が本児帰省中に家に立ち寄ったとするものや、祖母の言葉による「以前妻子ある男性と一緒にいたがその後、その男性と別れ何処にいるか分からない」とするものがある。本児の家とは全く関係が途切れたのではなく、断続的ながら、特に祖母とは続いているようである。施設との連絡は父がしている。

父、祖母、弟、妹による面会や本児の外泊により家族との交流がある。

### 〔生育歴〕

本児は母19才の時生まれるが、実父については不明である。'83年3月に4才5カ月で母の結婚により現在の父より認知される。'84年1月に弟が、'85年5月に妹が生まれる。'85年9月 (30日間) 本児5才11カ月の時

と、'86年1月(弟が火傷で入院。付添いの為)本児7才3カ月の時、A市児童相談所にて一時保護となる。'86年3月1日～'87年3月31日まで、里親委託となる。'87年12月1日(本児8才1カ月、小2)に施設措置となるまでの児童相談所の記録によると幼児期に遺尿、遺糞、夜尿あり。里親委託中は遺尿、遺糞が度々あり、現在は遺糞はなくなっているが夜尿、遺尿がたまにあると記されている。施設入所後も、遺尿、夜尿は頻繁に続く。面接開始時、夜尿が1～2日おきにある。施設内の上級生から「汚い」「臭い」という言葉をあびせられることがある。自分の汚した布団や下着がなかなか片付けられない。施設外の人には人当たりがよく社会的である。施設内では年下と遊ぶことが多い。

#### 【初対面時の印象】

長い髪を後ろで束ね、やや色黒で丸顔。中肉中背。健康そうで、ひとなつっこい笑顔が印象的。

### III. 面接経過

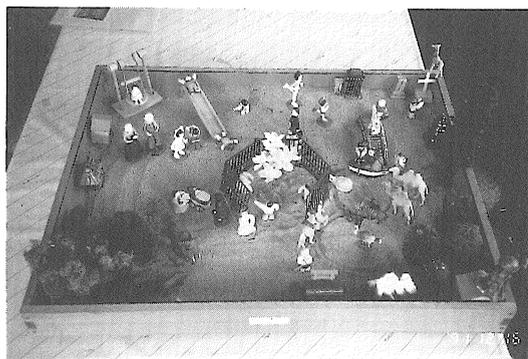
1991年7月～1992年3月までの8カ月間、28回の面接を行う。毎週1回50分の面接といくらかのお茶の時間を持った。この面接は、A子の家庭引き取りという外的出来事により終結することとなった。この過程をI期(#1～#11)、II期(#12～#18) III期(#19～#28)、に分けて記述する。

なお、面接経過はA子の承諾を得て録音した逐語録をもとにまとめたものである。文中、A子の言葉は「」で、Th(セラピストの略、以下同じ)の所感は【】で記す。

#### I期(箱庭の世界)

#1(7.16)：保母さんとともなわれて制服のまま入室する。

初回から次々と沢山、自分から話をする(好きな食物や学校のこと自分の家や家族について)。



箱庭No. 1 「花を大切にしましょう」

お父さんとお母さんの仕事について。「お母さんは散髪屋さん。切るのとか、パーマかけたりいろんなことしている」「お母さんは仕事一生懸命してるから(施設に外泊の時迎えにこれないのは)」「お父さんパチンコ屋さん勤めていた」と語る。面接時間が終わったことを告げると「ああ疲れた」と言う。

#2(7.29)：A子は、髪を三つ編みにしたものを両耳の上でまるめ、明るいえんじのリボンを結びとてもおめかしした感じでくる。キャンプにいて夜中に小さな髪の長い女の子の幽霊を見た話をする。「怖くないよ。窓の側に来て一緒にトランプして遊んだよ」。今回から置いた箱庭に使う人形たちを、あれこれ触ってみる。

最後に、乳母車に乗った小さな赤ちゃんの人形を手にとって「潰してやりたい」と言う。

#3(8.27)：箱庭No.1(45分)

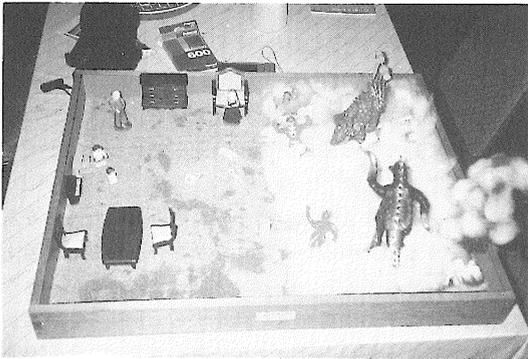
長かった髪をバツサリ切ってショートカットにしている。すぐに箱庭のところへ行き説明しながら作り始める。初めに右下に山と小さな犬のような動物を置く。「家、帰るところがないとね」と言う。棚の家を全部出して置く。箱の隅や端にジャングルや遊園地、学校などが置かれた後、中央に「花を大切にしましょう」と言いながら花を三本植える。その花のまわりは、指でぐるっとすじをつけて囲われていたが後から柵で囲む。何度か標語の様に「花を大切にしましょう」と言う。赤ちゃんの誕生や、キリンの死、神社や魔女、お巡りさんに追われる泥棒をした男の子、動物の争いなど沢山のものが表現される。「ピエロもいいけど粗末にされなかったらお花にもなりたいたい」と言う。

#4(9.3)：箱庭No.2(30分)

この前は家の外を作ったから、今度は家の中を作ると言って始める。初めに左から3分の1くらいのところを縦線を引いて区切り、左後方の一区画を「わたしの部屋」と言う。続き手前がお姉さんの部屋、中央下方がお



箱庭No. 2 「お金持ちの家」



箱庭No. 3 「家の中と外(戦い)」(1)

母さんの部屋，続きが食堂，左下がお父さんの部屋，奥が玄関，山と花のある部分は外の庭という順に作られる。箱庭が終わると、「お金持ちの家」と言いそえる。

A子が嬉しそうに「わたしの部屋」と言ってピアノを置いたその部屋は，どうしたのか妹の部屋になっている。【家族から切り離されて施設にいるA子の境過が窺われる。】

#### # 5 (9. 10) : 箱庭No. 3 (20分)

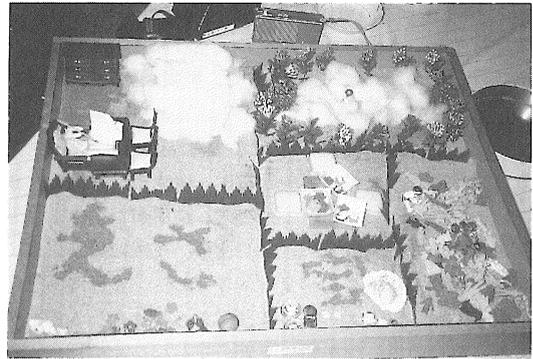
今回は，内と外を作ると，真ん中より少し右寄りに線を引き二分する。左側から作り始め，左後方にお爺さんとお婆さんの部屋をつくる。その手前には，子供部屋と赤ちゃんの部屋。下方は，食堂と物置。右側は庭にする。右後方隅に，ブランコやスベリ台，乳母車を置き遊べる場所を作る。やがて，今日は暑いから冬を作ると言っ，綿を雪にして，庭一面に敷きつめる。高い木も雪に埋もれる。黒い怪獣が真っ白い雪の庭に置かれ，もう一匹向かい合わせに金色の怪獣が置かれる。二匹は戦いを始め，ウルトラマンが一人，怪獣の審判として登場する。しかし，もう一人ウルトラマンが現れ，ウルトラマン同志も戦っていることにする。

#### # 6 (9. 17) : 箱庭No. 4 (20分)

外を作ると言っ始める。前回の終わりに病院を使うと予告していたとおり，一番初めに病院を置く。初回に作った箱庭と類似した部分や，同じ人形，動物が使われているところもあるが，これまで使われたことなかったジェット機，消防車，標識が置かれる。病院の前には幅の広い道があり，足をケガして痛い顔をした男の子の人形が病院に向かってる。

#### # 7 (9. 24) : 箱庭No. 5 (30分)

指で箱の中を縦，横に区切っていった後，そこに料理の飾りに使う緑のハランを生け垣のように並べていく。左下方部に，「えさ」と指で書き，文字の上に霧吹きで水をかけて，字をはっきりと浮き出させる。中央部には



箱庭No. 5 「宝の部屋」

「宝」の字を同じ様にして書く。左後方が男の子と女の子の部屋。宝の部屋の奥が食堂。右端は男の子の遊び部屋。左後方部が女の子の遊び部屋。

#### # 8 (10. 8) : 箱庭No. 6 (17分)

右下方に池が掘られ，舟と，その上に釣りをする男の人が置かれる。左後方は海，左下は動物園。動物ごとに線で囲いがされている。海の側に，スベリ台とブランコのある遊び場。初め，池としていたが，子供が入ったら危ないから湖にすると言う。湖と海には，六匹ずつ魚がバラまかれる。A子は，箱庭をサッと作って前回から始めたお花屋さんごっこにすぐ移る。この日，A子は雑多なものを入れた紙袋を二つ下げて来室する。その中から小さな「マッチ売りの少女」の絵本を取り出して Th にくれる。その絵本をA子は読んでくれ，「マッチをいくらかうらなくては，おかねをいくらかたなくては，しょうじょはうちにはかえれません」というくだりで，しきりに「可哀相だね」という。

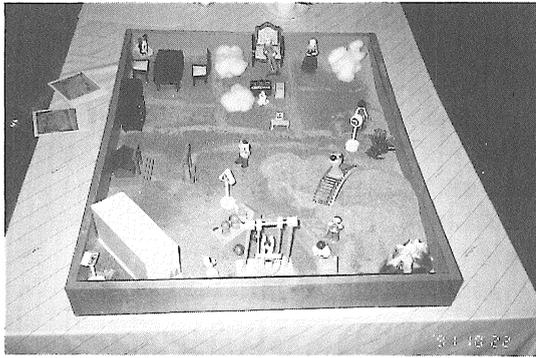
#### # 9 (10. 15) : 箱庭No. 7 (27分)

家の中を作る。箱庭の位置は，いつもとは反対側入口の方へ置く。今日も作ると言っやりだし，ドンドンと作り出し勢いがある。始めに各部分に区切ってから，左後方隅に花のある部屋を作り出す。一つ手前がお母さんの部屋，左下が男の子の部屋，中央後方左寄りがお姉ちゃんの部屋，右寄りが女の子の部屋，右下方中央寄りが食堂，イスが二脚あるのが別の女の子の部屋。花のある部屋には，すぐに水がやれるようにと，水が掘り出される。

【ゴム風船をピープー鳴らして Th を驚かして面白い。いたずらっぽく自由で生き生きしたA子に少しドキマギする。】

#### # 10 (10. 22) : 箱庭No. 8 (15分)

家の中と外の両方作ると言っ始める。上の家の中からつくる。右隅が玄関，左隅が食堂，お父さんの部屋，



箱庭No. 8 「箱の中と外」(2)

その手前が女の子の部屋，玄関奥がお母さんの部屋。家の外は，一番初めに病院，次に神社と鳥居，公園，橋が置かれその下を掘って池が作られる。

今回は風邪で学校を早退して来室直前まで寝ている。顔色が悪く元気が失せている。

# 11 (10. 29) : 箱庭No. 9 (27分)

店の中が作られる。ざっと場所が区切られ，レジ係の女の子が右下に置かれる。右上は家具売り場。左後方の広い部分に遊び場が作られる。左下はお花売り場。砂を掘って水をだし池の様なものの中に花を入れる。中央下にはお菓子売り場。季節は秋，時間は3時頃，A子の家のあるA市の〇〇〇デパートにするとする。

10月1日に家に電話をした話をする。

セッション後，保母さんからA子の父親から，中学になったら家に引き取りたいと言われていたことを聞く。

II期 (箱庭からプレイへ，面接室全体へと拡張)

# 12. # 13 (11. 5, 11. 12)

面接6回目からはじまったお花屋さんごっこは，次第に発展していろいろなお店に拡がり，12回目から箱庭はやめて，時間全部がお店屋さんごっこに使われる。A子はお花から買いはじめ，家具やピアノ，スベリ台やブランコ，車やヘリコプター，棚にあった箱庭の山までも買う。毎回マンガの主人公やその家族になってたくさんの品物を買いまくる。

薬局から発展して，病院ができお医者さんごっこになりThはお腹が痛いと言われ床に寝る。A子はThの盲腸の手術の後「ああ，赤ちゃんがいます。4カ月です」。続いて「ハイ，生まれました」と女の子の赤ちゃんをとりあげる。

この頃「わたしのお母さん飲み屋に勤めとらいにイ」とお茶のあと宣言するように言う。

# 14～# 17 (11. 19～12. 10)

Thが姉，A子が妹。「二人で住んでことにするね」面接室の半分が使われて家が出来る。妹のA子がお母さ

んのように食べ物を用意してくれる。二人でパンや，おにぎり，お刺身にステーキ，果物やお菓子と毎回たくさんのお母さんの物を食べる。お父さんがご馳走を持って帰ってくれたりするが疲れて眠ってしまっていて登場しない。お母さんは長期の旅行にでかけて留守。

# 15, A子は自室から縫いぐるみや大きな金髪の人形を持って来る。大きな金髪の人形「エメリーちゃん」も姉妹の暮らしの中に赤ちゃんとして入れる。

「この子は，ハーフってことにしよう。お母さんが外人で私達も髪が少し茶色ってことにしよう」とA子と言う。この頃から，縫いぐるみや「赤ちゃん」をベシッ，ベシッと言いながら平手でたたき真似をしたり「てめい」などと乱暴な言葉を口ばしったりするようになる。Thにも痒いと甘えてくる一方で否定的な言葉を投げつけてくる。

Thの髪に触りたがり編み込みをする。髪を結びながら「わたしのお母さん髪染めてるよ。茶色いような金髪のような。変なの，あんた誰，わたしのお母さんだって感じ。髪は短くショートカットで染めてるし化粧はしてるし。帰省した時，お母さんに会った時」と話す。

# 16の後，エメリーちゃんを一人きりで面接室においておくのは，可哀相と自室にもち帰ったものを# 17にカバンに入れて再び持ってくる。取り出されたエメリーちゃんは長かった金髪が切れショートカットにされている。A子の髪型に似ている。「切っちゃってからあまり良くないから切らなきゃ良かったと後悔している」と言う。この回，エメリーちゃんは自室へ持って返りその後二度と持ってこない。

# 18 (12. 17)

「今日はお母さんと子供ね」ジャンケンでThがお母さんの役になる。A子は面接室全部を使って子供とお母さんの部屋を作り，テーブルや出窓には，箱庭で使う花を飾り，ぬいぐるみやオルゴールをおく。部屋全体がみちがえるように明るくはなやかになる。

ベットのプタをいじめた子供(A子)は，お母さん(Th)にもっとやさしくしてあげたらと注意される。するとA子は「この子は悪い子だったので死んだことにするね。こんどは，いい子がこの家にくることにしよう」。ドアをノックしていい子が現れ，自分の部屋へ行く。

Thの後ろにまわって編み込みをしながら「今は保育園ってことにするね」と言う。

(A子 91. 12. 27～92. 1. 5 帰省)

III期 (プレイ，拡張から面接室のテーブルの上に収束)

# 19 (翌年. 1. 14)

子ネコのぬいぐるみと小さな哺乳瓶 (水が入ってい

る)など持ってくる。今回は姉妹に子ネコやリカちゃん人形、コアラやブタの縫いぐるみも入れて「6人家族だね。うちも6人家族だよ」と言う。A子は、子ネコを抱いてミルクを三度飲ませる。ブタだけがかまってもらえずミルクもなかなかもらえない。このブタは、一番かまって貰えないという設定になっている。

可愛い女の子の絵を描き、その子は男の子に好きと告白するが断られる。女の子はショックをうけ、可愛かった顔の上から目や口を悲しい顔に描きかえて、涙がポロポロ流れている絵にする。もう一枚女の子を描き、可愛い豪華な服の子を描く。失恋してまた泣いた顔にする。「この子はみえっぱりで本当は、かわいくみせてるけどブスなんだよ」と言う。「服も豪華そうだけど本当は、破れてつぎがあたっているんだよ」とつぎあてを描く。「リボンも本当は紐だったんだよ」と描く。

今回「殺してやりたい」と言う言葉を何度か口にする。  
#20 (1. 21)

お腹と頭が痛くて学校は休んでいる。【わりと元気そうな感じ。】箱庭の人形を使って13人の家族をつくる。クリスマスの次の朝家族の中の一人の男の子が突然暴れはじめ、おばあさんもお母さんもお父さんもどンドン押し倒し、テーブルや椅子もひっくりかえして大暴れする。やがて倒したテーブルの中で男の子は眠ってしまう。

#21 (1. 28)

「お姉ちゃん(Th)の誕生日だからプレゼントを用意する」と、ケーキや指輪をA子は用意する。リカちゃん人形からは、捨ててあった乳母車に乗った赤ちゃんがプレゼントされる。赤ちゃんが泣き出すのでThは魚の形の醬油入れを、たちまち哺乳瓶にして赤ちゃんにミルクを飲ませる。赤ちゃん(A子)は、「チュウ、チュウ、チュウ」とミルクを飲む。A子は、赤ちゃんになって泣きたて、そのうち歌うような調子になって楽しみ、電話の向こうでも「ママ、オギャーオギャー……」とはしゃぐ。

#22～#24 (2. 4～2. 18)

一緒に塗り絵をする。男の子と女の子の髪を金色と茶色に塗り、A子「ヤンキーは怖いよ、ちょっと当たただけでも怒るよ」。二人の絵は笑った顔だったが、「本当の心は怒っているんだよ」と二人のわきに怒った顔を描く。「ムカーッ」という言葉を添える。

【この頃お茶の時間が短くさつきりあげる感じ。】

これ迄の面接の回想や、小学2年生の12月3日(木曜)相談所の先生と一緒にこの施設に来た話をする。

カウンセラーの連絡帳を繰ってみたりもする。【まだ正式に家庭引き取りが決まっていなかったが、別れの準備を

始めているよう。】

#25 (2. 25)

お母さん(A子)と、双子の女の子(Th)になって遊ぶ。箱庭の人形を使って母子でハンバーグを粘土で作る。ハンバーグの大ききの事で母子は口論になる。厳しい口調のお母さんと、優しい声のお母さんの二つのタイプをA子は演じる。

#26 (3. 3)

前回同様の配役。女の子は、お母さんに可愛がられる子と苛められる子ができ苛められる子の方がTh。可愛がられる女の子の今日は誕生日。プレゼントや花束をお母さんから貰う。苛められる女の子がその花束をこっそり捨てようとするとお母さんに見つかり、ぶたれ、首を紐で縛られる。召使いが側に来て助けてくれるかと思うと、見捨てて行ってしまふ。苦しがる女の子のところへ今度は、天使がやってきて首に巻いた紐を解いてくれほっとしたかと思うと、天使はそうはいかないと、もう一度、首に紐を巻いて飛び去ってしまう。女の子は死んでしまふ。

この可愛がられるお金持ちの女の子の隣には、貧しい男の子の家があり男の子(Th)は、隣の家を羨ましうに見ている。隣のお金持ちの家からごちそうの残りが男の子の家を持って来られ、これでお腹のすいた男の子は食べ物にありつけるかと思うと、突然男の子のお母さんが食べ物を受け取り、アッという間に自分だけ食べてしまふ。男の子は寒くお腹は減り、眠れないで苦しがつている。そこへどンドン沢山の食べ物と並べられる。大きな山のようなケーキもある。男の子は喜び食べようとしたとたん、でもこれは全部夢と、さっと食べ物やお菓子は無くなってしまふ。一つだけ残った食べ物を男の子は拾おうとすると、天使がやってきて「これはお前にやらないよ」と持って行ってしまふ。しかたなく男の子はベットに入るが悪夢に襲われ、首や身体を締めつけられてベットでもがいている。

#15から口紅に関心をもっていたA子は、#21にはリップクリームを持って来室し、面接室でそっと塗ってみる。

今回Thのかばんの処へ行き「口紅持ってる？」ときく。「あるわよ」と言うY子「つけてみて」。ThはA子の唇に紅を塗る。ひと時、ThもA子も息をつめる。

【紐落としの時、母親が幼い我が子に成長を折って自分の口紅を塗るように今度は女の子から、大人の女への門をくぐる儀式のよう。】A子から、家に帰ることが決まったことを聞く。

#27 (3. 10)

面接の時間中、口紅をつけている。Thのことを「としちゃん」と呼ぶ。可愛がられる女の子と苛められる女の子は、お母さんに内緒で仲良くなる。可愛がられる女の子について「この子は恐いけど優しい心もあるんだよ」と言う。

(3. 17) A子風疹の為中止

#28 最終回(3. 20)

「今日でカウンセリング最後だね。なんか淋しい気がする」「アッという間だったね(カウンセリング)もって続けてもよかった」。そう言った後いつもとかかわらぬ感じでお母さんと女の子二人の家族をつくる。一人の女の子がお母さんに苛められ、とうとうその子はよその家の子になったことにする。家族ではなかったケン太君が遊びに来ているうちにこの家の子になる。お風呂に入っているケン太君に前のお母さんから電話。「家に帰ってきなさい」「ボクやだよ」。前のお母さんが迎えにくると、今のお母さん「うちの子になったから帰って下さい」と厳しく追いつ返す。

二人でコーヒーの砂糖の袋を折って三角を作り「交換して御守りにしよう」とA子が言い出し、そうする。A子は、その「御守り」を最後まで手から離さず施設の門までThを見送ってくれる。(3月22日午後退所)

#### IV. 考 察

##### (1) 箱庭とプレイからみたA子の「家族」イメージ

###### ① 母親イメージ

本児A子は、家族歴、生育歴に見られるとおり、育ってきた環境は決して恵まれたものではない。軽度精神薄弱の養育観念に乏しい母は、A子をはじめ、子供のことを父や祖母に任せきりにしてきた。A子は5才から7才までに、児童相談所での一時保護を二度体験し、その後7才で一年間里親に委託され、やがて両親の離婚により8才で施設措置という養育者の都合により転々とさせられ、既に幼少期から母親に捨てられた状態だったと言える。

Winnicott, D. W (1965) は生後早期に、「母子相互の没頭と錯覚を人生において、まず母親との間に持てる子供はそれ以外の人間と人間の関係においても、ほぼよい安定した対象関係をもつ準備が与えられる」と述べている(牛島, 1977)。また Erikson, E. H (1963) は、母と子の安定した相互関係が成立することによって、子供の人格の基底に「基本的信頼感」が作りあげられていくと述べている。

A子の心の中には、母親もしくはその代理者との間にこの「基本的信頼」が確立されていたとは考えがたく、

むしろ不信が深く無意識に根をおろしたと考えられる。

A子が初めて作った箱庭(No.1)の中に見られる母親の人形は、赤ちゃんを抱いた positive な像である。その後の箱庭にも、母親と赤ちゃんは何度も登場する。初回と同じ赤ちゃんを抱く母親は、家の中や外と場面は異なるものの、箱庭9回のうち5回使われている。違う母親役の人形と赤ちゃんとの組み合わせも数えると、「母親」人形は9回中7回箱庭の中に見られる。「母親-赤ちゃん」この結びつきへのこだわりは、何であろうか。A子の弟や妹は、赤ちゃんという年齢は既に脱している。赤ちゃんを抱く人形の母親の顔は喜びにあふれ、晴れやかである。それは、母子一体化したとも言える像で、A子は棚に並ぶ多くの人形の中からそれを選びだしたのである。母子一体化はA子が無意識に求め続けるものであり、A子が選ばずにはいられなかった人形なのである。

箱庭中、母子像とも思える母親以外で、A子が母親役にあてた人形は、一方でおばあさんの役をした人形だった。A子の中で、母親と祖母は、(現実には祖母が母親代理であったということから)役割から重なってイメージされている部分があるのかもしれない。他には、「書きもの」をしている母親が登場するが、この「書きもの」という言葉は、施設で保母さんが記録をつけたり、書類を書いたりする仕事全般を指して使われている。この書きものをしている母親や、ケガをした子供を病院に連れて行く母親は、保母さんのイメージが強く重なっているように思われる。

一方、プレイ中に語られる母親は、実際には姿を現さない。「長期の旅行」に出かけていたり、「病気療養中」であったりして不在なのである。

14回から17回にかけて、大きな金髪の人形「エメリーちゃん」が面接室に持ち込まれる。A子はこの人形の髪をすいたり結ったりしていた。15回に、「私のお母さん髪染めてるよ。茶色いような金髪のような。変なの。髪は短くショート・カットで、染めている化粧ははしてるし」と語っている。母親のことを口にしたのと符号するかのようになり、17回には、「エメリーちゃん」の長かった金髪がバツサリ切られ、ショート・カットにされている。この人形はA子のそれにも似ていた。「切ってしまったから、あまり良くないから切らなきゃ良かったと後悔している」と言うが、A子は無意識に母親との同一化をはかろうとしたのだろうか。

A子の心の中には、良い母親イメージと悪い母親イメージの二つがあり、プレイ26回では、そのことが双子の少女に対して如実に表現される。優しい、なんでも満たしてくれる母親と、厳しく、冷酷な最後には死にまで

至らしめる母親である。豊かな空想は、親イメージを勝手に作り上げる方向へと発展する。目の前に実体が存在しない分、必然的に美化し、良いイメージを作り上げてしまう一方で、「捨てられ続けた」恨みによる悪いイメージが統合されないまま、両価的（アンビパレント）な親イメージとして内在化されることになり、A子の精神状態を不安定にしていると考えられる。

母親への同一化はもとより、A子は祖母にも保母さんにも同一化できずに成長してきている。家族の面会や、夏休み、冬休みには家に帰ることを楽しみにしているA子ではあるが、それは、絶えず一時的なものであり、他の四人の家族とは一人切り離され、切り捨てられる存在をなめ続けるところに、祖母への同一化はしきれないであろう。また、十数人の異なる年齢の子供達を二人の保母さんで世話をされている環境にあつては、ただ一人の子のための時間も気持ちも向けきれない状況の保母さんに対しても同じであろう。A子にとって、信頼に足る確かな対象イメージは内在化されないままである。

## ② 家族のイメージとその問題

初回の箱庭でA子が口にした「家。帰るところがないとね」という言葉に象徴されるように、A子にとって家は帰り着く場所だった。小学生や中学生の人形達は家路に向かうか、帰宅して玄関に足を入れたところである。仕事に行っていたお父さんも帰って来るのが「家」である。

A子は箱庭の中に、5回（#4・5・7・9・10）「家の中」を表現している。5回作られた「家の中」は、A子によれば、「お金持ち」の家ということだが、区分けされ、家族はそれぞれの場所で孤立した印象を強く抱く。2回目で作った箱庭では、「私の部屋」といって、ピアノや机、ベッドを次々と置いていったが、部屋が整うと妹の部屋になってしまう。5回目の箱庭でも、「私の部屋」と言って作り始めたが、男の子と女の子二人の部屋に変わってしまう。「私の部屋」は、作りたい気持ちはあるのに途中でしぼんでしまう。A子が家族からはじき出されてしまった現在の境遇が重なって見える。一方施設の中の共同生活の場でも、自分が一人になれる場所はトイレの他にはない。「自己」のいる場所はいつも誰かに占領されていて、「自己」の安定した居場所がない彼女の現実が窺われる。

A子はプレイの中で、たくさんのお金を持って、様々な品物を買いきり、食べたい物を次々と食べ続けた。摂食障害に関する論文において、滝川（1979）は、『食事』は『食物』や『食べること』とは次元を別にする对人的・社会的意味を含んだすぐれて人間関係論的な実態

であろう。そして、さらに一步踏み込むとすれば、『食事』は何よりもまず、『家庭』の表象と考えることが可能であろう」と述べている。毎日生活する「家庭」をもたないA子が示す貧欲なまでの食事生活は、A子の母親と更には家族との交流を求める強い欲求の現れであり、Thとの「食事」はその代償と言えるかもしれない。

プレイ中の「食べること」「食べ物」は、食べ物をたくさん持って帰ったり、買っておいでくれる人としての父親を想起させる。父親は決して食卓を共にせず、仕事から帰ると疲れて眠ってしまう。A子は、箱庭の中で父親の人形として、遊んでいる子供をカメラで写している父親（3回使用）、男の子をたかいたかいている父親（2回）、おじいさんの役もした父親の人形と三つの人形を登場させている。A子はカメラで子供を写している父親の人形を砂に置きながら、「お父さん、やさしい」と言葉を添えた。施設措置前の児童相談所の書類には「父親、祖母の面会時にはとても喜び、父親には抱きついて行ってはしばらく離れなかった。母親のことはあまり口にしない。又、母親の来所等も一度もなかった」と記録されており、A子と父親との関係が推測できる。

A子のことを心配したり、物を買ってくれる父親であり、A子の父親イメージは外的にも内的にも positive である。しかし、箱庭でのおじいさんの人形を父親役にあてたことや、プレイ中に「登場するが、疲れて寝てしまう」父に象徴される弱々しきは、現実に病弱であり障害もあり、仕事も長続きしない「心配な感じ」の父でもある。

A子は、弟や妹のことを口にする時は、よく面接室のおモチャのどれかを指して、「見せたら喜ぶだろうな」「持って帰ってやりたい」と言った。A子は、担当の保母さんによると、学校でも友達間でちょっとした物を遣り取りしていると聞く。Thとの面接を始めてからも、面接の度にちょっとした物をくれることが多かった。それはマンガの付録だったり、メモ用紙の数枚だったり、折り紙だったりした。

心の深い部分で人間不信に陥っているA子には、精神面よりも物質面に頼ろうとする傾向、更には、対人関係においても物質面でのつながりを求めることしか術を持たないのだろう。A子は7才の時、里親に委託されて家を離れているが、その時弟は2才、妹は1才であった。その後施設に入り、弟、妹と共に暮らしてはいない。帰省中、一時的に会うだけである。（今年の夏休みは、12日間家で過ごす。）弟や妹と関係をとるためには、A子には“物”が必要なのであろう。自分が施設を出る時には、弟や妹の為にオモチャを持って帰ってやりたいと言

うA子には、“物”を介して自分の場所をあけて欲しいという願いが込められているのかもしれない。又、“物”を他者にあたえることで、好かれない(愛されたい)という間接的な心の充足願望が窺える。

Quintonらは、幼児期の deprivation が単に一人の個人に留まらず、世代から世代へと影響を及ぼしてゆく可能性に関する報告で、母性の剝奪を人類の発達に有害な作用を一時代に限らず、何代もの将来にわたり及ぼしてゆく社会的な問題として認識しなおすことを促している(渡辺, 1982による)。母親になった女性は、自分自身と自分の母親との関係を意識的にせよ、無意識的にせよ想起する。彼女は自分を自分の母親と同一視し、赤ん坊を自分と同一視する。つまり、一世代前の母子関係が多少とも再現されてくる。そして、その母親から適切な愛を受けなかった女性は、自分の子供を不適切に扱ってしまう。A子の家庭にも、祖母から母、母から子へと問題は連鎖している。乳幼児期よりA子に愛情を向けることがなく、やがては三人の子供を捨てて別の男性との関係を求めたA子の母親自身、自分の母親とのしっかりした絆が築かれていなかったものと推察され、母親自身、未だ「愛されたい」感情を抱えて生きる人ではないだろうか。

## (2) 面接経過からみたA子の変化

家庭崩壊という危機に直面し、養護施設という特殊な環境で生活しているA子は、きわめて外交的であり、人なつっこい明るい少女だった。一見、事態は子供をさほど傷つけずに成長させたのかと楽観的に考えられもしたが、面接を重ねA子の内的世界がみえてくるに従って、明るさは異様とも思え、心に潜む問題が大きいゆえの防衛機制であることが明らかになった。

施設に預けられた子供たちは、捨てられっぱなしである。その不満をぶつけ寂しさを癒す親はそばにいない。施設は生活の場が保証され、養育者として保母や指導員の人がいるが、その養育者は頻りに替わり、継続した1対1の関係として守られ癒される場を形成することは困難である。

Thは、保母さんからA子に「勉強のことも心配なこと、困っていることなんでも相談していい人」として紹介される。Thは「この面接室では、やりたいことを好きにしている」ことをA子に告げる。A子にとって週一回とはいえ、自分のためだけに誰かが時間をさき、共に話をし遊んでくれるという経験はかつてなかったことであろう。面接室という「自由で保護された空間」の中で、これまで抑圧し続けてきた negative な感情も安心して吐露できる関係が形成されていった。

I期においては、箱庭の中にA子の内的世界が表現さ

れた。箱庭療法は、無意識の世界を含んだ漠然とした人の心にはっきりとした形を与え、深層を体験できるものとされている(河合, 1969)。A子は自分が作り出したイメージの世界に新鮮な驚きと、「語れないが示すことができるもの」を表象化した喜びを体験し、回を重ねるにつれて、一層生き生きと活気に満ちて遊びに没頭した。これまで抑圧されてきたものが、A子の中で確かに動きはじめてきた。

やがてII期になると、場面は箱庭から面接室全体に拡大し、箱庭最後に作られた「デパートの中」の動かず言葉を発しなかったミニチュアの人形たちにかわり、Thをまきこんで、ごっこ遊びに発展させていった。A子は退行し、買い物ごっこやおままごとで、ご馳走を食べまくった。長い間の欲求不満を「食」と「お金」を通して、まるで「愛の取り入れ」作業で解消しようとするかにみえた。

さらに、Thに対して甘えてくる陽性感情と、これまで抱いてきた人間への不信、ことに母親への怒りと攻撃とも思える否定的な言葉の投げかけがみられた。

A子の人への深い不信感のあらわれは、I期では、箱庭(No.3)におかれた正義の味方で、通常は怪獣をやっつけにくるはずのウルトラマンが、怪獣と同レベルで戦ってしまう場面や、III期の26回のプレイ中、神の使者である天使が苦しむ少女を助けるかと思うと、まるで悪魔のようにむごい裏切りをする中に窺われる。

A子は小2の冬から施設に入所し、これまで何度か家族から「家に引き取るから」という言葉を聞かされている。「3年生になったら」「4年生になったら」といつつ、現実とはならない大人の悲しい裏切り行為に、A子は大人に対する不信感を強めていったのではないだろうか。

心理面接は援助者と被援助者間の関係が深まるにつれ、母子一体感に通じる関係が作られていく場であり、ThとA子にもそのような関係が底に流れていたことは十分感じられる。A子はプレイ中、Thを姉の役から母親の役へと対象を移行させようとした。一度だけ、Thが母親役になってプレイが行われたが、それは二度と繰り返されなかった。Th自身プレイ中に母親役にははまりきれず、気持ちが姉役の時の様にスムーズに動かなかった。A子にしても施設で上級生の子をお姉さんとして慕う関係は持っていたが、母親という対象との関係の取り方はどこでも学習できておらず、劇化することが不可能だったとも思われる。母親に対する自己の持つ良いイメージと悪いイメージは、Thを女の子にしたてて、あるいは姉妹としてすさまじいまでに劇化し得たことと

(#26) 対照的である。

8ヶ月間という短い期間、A子に言わせれば「アっという間」のひとつきではあったが、面接はA子にとって温かい心の交流の場であったことと確信する。

遊戯療法の一般的過程として、多くの研究者が試案的なモデルを提示している。深谷(1971)は、①不安と探索期②行動化期③攻撃性拡大期④創造と再構成期⑤離脱期に分けている。本面接の経過は遊びの変化を中心にⅢ期に分けたが、深谷のモデルを参照にすると、Ⅰ期は深谷の①に、Ⅱ期は②、③、Ⅲ期が④、⑤にほぼ対応すると考えられる。

A子の攻撃性(憎しみやnegativeな感情)についてみると、それは2回目からすでに表現され、赤ちゃん人形を手にして「潰してやりたい」と呟いていたが、15回にはさらに強まり、赤ちゃんをベシッ、ベシッと叩き直接行動で怒りをぶつけた。更に20回では、大暴れに暴れ激しい攻撃性を発散させた。19回では、「子ネコにミルクを飲ませる」というpositiveで母性的な行動の反面、「かまってもらえないブタ」がいて、冷たい仕打ちを受ける。同様にpositiveに表現されたものが、直ちにnegativeに変容されてしまうということなど、A子の心の葛藤、不安定感の現れととらえられるであろう。

攻撃性は、Horneyによれば、自己主張の一種であり、自己と人生に対するpositiveな建設的態度であり、成長していくためのひとつのエネルギーであるという。またStorも人間性の攻撃部分は、知的な仕事をなしとげたり、独立を達成したりする基礎であり、仲間の中で己を持するために必要な自尊心の基礎でさえもであると述べている(小椋他1982)。従って、遊戯療法過程にあらわれる攻撃性は成長への積極的意味としてとらえることができる。

しかし、一方で遊戯療法としてとらえたとすれば、A子にとって、まだ内的には離脱期にはいたっていない。外的状況によりやむなく終結せざるを得なくなったのであって、A子は「カウンセリング、もっと続けてもよかった」と、その思いを表現している。

当初、施設職員から提示されたA子の問題について若干ふれておきたい。夜尿は、面接前と比較してかなり減少した。特に3ヶ月経過した11月には、たまたに夜尿がある程度にまで改善した。しかし、施設退所が決定し、小学校を卒業するという時期の3月には再び増加し、A子の精神的不安定感とパラレルであることが窺われた。また清潔面については、職員の報告によると、机の中はまだ整理できないが、机の上の整理は自らきちんとできるようになった。また、保母へのいたわり、友達への思い

やり行動が見られるようになったとのことである。

面接経過に見る通り、A子は大変エネルギーがあり、内的に豊かなものをもっている。家族の危機に直面しながらも、それにくじけない強さと健康さを保っている。

これからいよいよ思春期にさしかかるA子には、その発達課題である自我同一性をめぐる問題に直面することになる。また、新しい環境に適応していかなければならない。最終回にThと交換した「小さなお守り」が少しでもA子の心の支えになって、大きく成長していつくれることを祈る思いである。

## V. おわりに

全国養護施設協議会の調査によると、養護施設に入所する児童は、全国的に減少し定員割れとなり、全国平均充足率も83.3%となっている(『子ども白書'91』)。このような現象は、養護施設が存在そのものを揺るがせるような問題で、関係者は「養護施設はいままさに歴史的転換期を迎えている」と認識している。

「制度検討特別委員会」(全養協)は、これからの養護施設に求められることとして『『入所児童の養護のみならず、地域社会における子育ての専門機関としての役割をも養護施設が担い、地域社会の児童の健全育成の発展に寄与すること』が必要であるとして、『家庭養育支援のためのサービス』『発達上に障害をもつ児童の受け入れ』など新たな養護需要への対応としての事業に積極的に取り組むこと』を提言している。これは、経済的貧困や親の実質的不在に限らず、「事実としての養育困難の諸形態」として広く捉えようとするものである。このように養護施設の抱える今日的課題は多様であり、変容している。

1951年5月5日に制定発布された「児童憲章」の冒頭の「児童は、人として尊ばれる。児童は社会の一員として重んぜられる。児童はよい環境の中で育てられる」という一節は、子どもに対する大人の対応のあり方を提起したものである。40年経った昨年、世界の子どもの生存と保護、発達の保障を最優先課題としようとして「子どもの権利条約」(国連総会)が起草され、世界各国で批准されつつある。ユニセフの「世界子ども白書」(1991年版)は、「子ども最優先の倫理」の確立を主張している。その中で「世界には常に、子ども最優先の倫理よりも緊急を要するものがある。けれども子ども最優先の倫理以上に重要なものは決してほかにない。」と述べている。

筆者らは、施設で生活する一女児との個別的関わりの中で、彼女の抱えている問題、施設の現実などに直面した。先に述べたように施設の課題は大きいですが、現に施設

にいる子どもたちに対して、個別に関わることの重要性を実感し、施設にいるすべての子どもたちに対して精神的サポートがなされるよう、施設の質的改善の必要性を痛感している。

#### 〈謝 辞〉

本事例の面接経過中、暖かいコメントと励ましをいただきました島根大学保健管理センターの船井哲夫先生に心よりお礼申し上げます。

## VI. 文 献

- Bowlby, J. 1951 *Maternal Care and Mental Health*. WHO, Geneva. (黒田実郎他訳 乳幼児の精神衛生. 岩崎学術出版社. 1967)
- Bowlby, J. 1969 *Attachment and Loss, vol. 1. Attachment*. Basic Books. New York. (黒田実郎他訳 1973 母子関係の理論 I, 愛着行動. 岩崎学術出版社.)
- Bowlby, J. 1973 *Attachment and Loss, vol. 2. Separation*. Hogarth Press. London. (黒田実郎他訳 1977 母子関係の理論 II, 分離不安. 岩崎学術出版社.)
- Erikson, E. H. 1963 *Childhood and Society*, 2nd., Norton, N. Y. (仁科弥生訳, 幼児期と社会. みすず書房. 1977)
- 深谷 和子 1974 幼児・児童の遊戯療法. 黎明書房.
- 伊藤 安二 1979 家族崩壊の社会心理学. 教文堂.
- 河合 隼雄 1969 箱庭療法入門. 誠信書房.
- 森田 喜治 1990 「僕を引き取ってください」. 心理臨床学研究, 第 8 巻, 第 2 号. 66-77.
- 日本子どもを守る会 1991 子ども白書. 1991年版. 草土文化.
- 日本子どもを守る会 1992 子ども白書. 1992年版. 草土文化.
- 小椋たみ子・大西 俊江 1982 一吃音児の遊戯治療過程の研究. 島根大学教育学部紀要 (人文社会科学) 第 16 巻. 55-69.
- 大日向雅美 1988 母性の研究. 川島書店.
- Rutter, M. 1972 *Maternal Deprivation*. (北見芳雄他訳 母親剝奪理論の功罪. 誠信書房. 1979)
- Rutter, M. 1981 *Maternal Deprivation Reassessed*. (北見芳雄他訳 続母親剝奪理論の功罪. 誠信書房. 1984)
- 高木 隆郎 1959 乳幼児期における母子関係の障害(1) —母子の分離—心理学評論. 3, 271-291.
- 滝川 一広 1978 思春期における食事の障害. (中井久夫他 思春期の精神病理と治療. 岩崎学術出版社)
- 渡辺 久子 1982 母性的養育の剝奪と家族 (その 2). (小此木啓吾他 講座, 家族精神医学 3, ライフサイクルと家族の病理. 弘文堂)
- Winnicott, D. W. 1965 *The Maturation Processes and the Facilitating Environment*. (牛島定信訳 情緒発達の精神分析理論. 岩崎学術出版社. 1977)